

講演テーマ：「農山村におけるグリーンツーリズムと小学校長期自然体験活動の可能性と課題」～北海道における小学校長期の取り組みとグリーンツーリズムの事例を紹介～

講師：宮本英樹氏（NPO 法人ねおす専務理事）

日時：2010年2月6日（土） 15時～17時

会場：福井県福井市中手町 伊自良温泉 小座敷

司会：ねおすは北海道でも全国でも有名な NPO 法人の自然体験活動の老舗の団体のひとつです。最初立ち上げの頃は大変だったそうですが、やるぞと肚を決めてやったメンバーの一番若手が宮本さんだったそうです。その時27、28歳。今が40歳ちょうどですね。お若いですがマルチタレントで、非常に多才です。なぜ宮本さんはそんなにがんばっているんですか？と聞いたら、やっぱり北海道を良くしたいんだ、ということでした。そこに色んな思いが関わり合って、今の様々な事業をなさっているようです。

今日は、色んなアイデアをいただいたり意見交換をさせていただきたいと思います。宜しくお願いいたします。

#### 《現在の取り組み》

元々ねおすという団体は自然体験活動を勧めていく団体で、特にエコツーリズムで札幌に本拠地を置いて、札幌の人たちを北海道の違う地域に連れて行って行っていました。その後、行った先の地域で受け入れる仕組みをつくってほしいということになり、自然学校をつくることになった。なので色んな地域に10カ所くらいの色んな自然学校をつくっている状態です。

現在は、子ども達に教育的なことをするだけじゃなく、それを支えていく仕組みや制度もつくっていく役回りも出てきています。そのひとつが子ども農山漁村交流プロジェクトの「ブロックコーディネーター組織」というものです。ほとんどの親御さんや学校の先生方はこの事業のことを知らないのとにかく宣伝をしようということで、新聞に広告を入れたり、札幌駅近くに展示ブースをつくったりということもやっています。

自然体験活動や自然案内の現場での仕事と、中間でそれを支援していく組織では若干やるのが違ってくる。これまではネイチャー、つまり自然が売り物だったんですが、そこから農村に下りてくるときに組織を変えた方がいいだろうということで、今は「ふるさとづくりセンター」というものを、色んな強みがある団体さんと組んで、今つくる予定です。その中で、ひとつの商品というか、僕らがつくらなきゃいけない、かつ売れるだろうと思っているのは「地域コーディネーター」です。特に地域内で連携させる、あるいは地域と地域を連携させるようなコーディネーターをつくって、そこで「農村業」というか、農業というより農村全体を使った色んな産業化をするコーディネーターが不足している。それをつくっていかうと考えています。

#### 《“らしさ”を極める》

僕は北海道生まれの北海道育ちで、開拓してから4代くらい離れてます。なので子どもの頃から、すごく日本に憧れたんですよ。自分は何人なんだろうと常に思ってた。たとえば日本昔話やアニメを見ても、全く違う世界なんですよ、北海道って。なのでとりわけ日本に詳しいです。日本にすごく憧れて日本の勉強をものすごくしているので。竹やぶを見ても感動するし、瓦屋根を見ても感動する、北海道にはないので。

なので、僕の仕事のモチベーションは“アイデンティティ”です。自分の存在は何か。それをつくる、ということ。だから北海道らしさや、北海道らしく生きるという、日本人とは違う生き方を模索して、そこに新しいライフスタイルをつくるのが最大のモチベーションです。格好よくいえば、自分が自己受容できるような生き方ですね、誇りをもって生きられるような。

そういう、日本人かぶれた外国人が見ると、日本中どこ行っても“日本らしさ”というのはあまり

ありません。東京行っても福井市内に行っても。昨日もホテルに泊まりましたけど、皆同じ。人口数万人のところに行っても、こんなロードサイト型の店をやってるんだ、ってショックを受けます。

というのも、日本は日本だけでは生きていけないですよ。世界の日本なわけです。経済に関しては完全にグローバル化、世界経済オンパレードです。その中で世界が日本に求めることは何かというと、“日本らしさ”です、明らかに。やはり日本らしさなくして、世界経済や世界の人たちと一緒にやることはできない。多分、僕が外人っぽいので、僕が日本に対して求めていることと同じことだと思います。そうすると、僕が日本を旅する限り、日本らしさはもう地方にしか残っていない。あるいは残ってる地方というのはかなり限られてきているんじゃないか。

この辺りは“らしさ”が残ってる雰囲気がありますね。高い屋根があって、雪に埋まっちゃったりとか、あれは僕がまさに日本の北国に求めている風景です。それはこっちの人からすれば、大変でやってられないよ、ってことになるんだけど、回りからすれば“らしさ”です。その“らしさ”が今求められていて、“らしさ”を守ることは世界の最先端になれるはずで、絶対に。なぜなら、ないんだもん、他に。同じものをつくっていたんじゃ最先端にはなれません。“らしさ”を追求した方がいい。

### 《里山という“日本らしさ”》

来年 COP10 が日本で行われますね、生物多様性条約が日本で行われる。そのときに、日本らしいものを宣言しなくちゃいけないんですね。今市民サイドから出ているものは「里山ビジョン」というやつです。それが案件に上がっている。つまり里地里山の生活様式が、生物多様性を守るライフスタイルである、ということが来年発信されます。ということは、世界から求められたことはそこなんです。日本で会議をやるのに、車が云々とか生物を守ろうとか言っても、それは皆納得しないわけです。日本にはエコロジカルシステムがないの？って言われちゃう。すると、そういえば日本には昔ながらの暮らしをしながら、生物が一番多様である時期を留めてきたという歴史がある。それを発信してほしいと世界から言われてしまうわけです。

「日本らしさとは何か」というと、こうした地方にある生活様式なんです。美山で雪下ろしを見て思ったことは、養老先生の本で絶版になってしまった「手間の文化」という本です。日本は手間ひまの文化だと。暇があれば水をやり、枝を切り、雪を下ろし、手間ひま惜しまず、その時その時に手を掛けることで美意識をつくってきている。そういう生活スタイルこそが日本らしさなんだと養老先生はおっしゃっていますが、確かにそうです。

そういう知恵とか週間が今絶滅に瀕していると思いませんか？ぎりぎり今のおじいちゃんおばあちゃんの美意識の中に存在しています、生活様式の中に。例えば夜布団の下に服を敷けば朝ピツとなっている。それはやはり今受け継がなきゃいけない手間の文化だと思うんです。地方の農的な生活様式は、それを保存していると思われま。暮らししていく知恵、美意識、手仕事。

### 《欲求の段階》

マズローという人は、人間の生理的欲求は段階的になっている、と言いました。最初に「食べる欲求」「安全の欲求」「社会的欲求」そして「自己実現の欲求」と段階的になっている。それを国家として考えたら、食糧がなくなるかもしれないという、最初の安全的欲求が満たされていない国家は当然ぐらぐら揺れます。それは都市部の生活者も全く同じです。

今自殺率が一番高い県はどこか知ってますか？ここ1年でいきなりトップになったのが名古屋です。愛知県。それはやっぱり、ものを食べるということがしっかり保証されていないと、人間はかなり不安定になるということです。ちなみに北海道は今、自給率がカロリーベースで200%くらいです。そうすると、不況だと言われても生活はあまり変わらない。ずっと不況ですから。でもいざとなったらその辺のものを食べるわけです。やはりその安定感が心の安定感にすごく寄与している。

### 《農的暮らしを保存する》

都会に土の香りが全くなくなりました。地方に少し残っている以外は、画一化均一化している中で

都市化しているので、そういう香りはしなくなりました。そこで未曾有の食糧問題やいろんな問題が起きたときに、ここ数千年暮らしてきた技術を活かす、もしくは生きてくる時が必ず来るわけです。しかし、それは今のおじいちゃんおばあちゃんがギリギリなんだと思う。

これを何とか違う方式で保存することが大事なんです。もしくは記憶に留めておく。これが多分、子ども農山漁村交流プロジェクトの根底です。今の子どもたちの中に、あるいは今いる若い人たちの中に、今いるおじいちゃんおばあちゃん達や農的暮らしから汲み上げてきたものを保存しておく。僕は、このプロジェクトはもう“遺言”プロジェクトである、と思っています。だってもう死ぬんだもん。限界集落と言われて久しいけど、必ず30年後にはなくなる。でもその前に遺言としてきちんと取り留めておかないと、あとから「あの時おじいちゃんがああ言ったのに、やらなかったよな」ということはよくあることです。だから、なくなっちゃうということを意識したときから初めて未来が見えるのではないかなと思うんです。それが、「なくならないんじゃないの？」っていう延命措置がとれると思っているうちは、多分、未来はみえない。やっぱり、なくなるからこそ何をしなきゃいけないか、っていうことを意識したときから始まるんです。

僕みたいに日本人かぶれた外人から見たら、日本のこの技術や美意識は、必ず保存してほしい。僕ら北海道人が本島人に望むことはそれです。やはりこっちに来て勉強したいことはそこにある。例えば北陸や東北にお客さんをツアーで連れて行く時も、取材テーマはそこです。同じような自然条件であっても、例えば東北と北海道では、同じ森でも恵みの取り方や食べ方が全然違う。それを学びに行きたいなあと思っているので、今まさにそれを保存してほしいと。

#### 《“強み”を考える》

経営マネジメントに、「強みを伸ばす力」を分析して、どこからやろうか、と話がよくあります。基本はやはり“強み”なんです。強みを伸ばす力と、弱みを補う力というのは同じくらいかかるんだけど、弱みを補うのはゼロにしかならない。同じ力をかけるなら、強みを伸ばした方が2、3になる。なので、強みを伸ばすことが大事で、そうすると、発想を転換して「何が強みか」ということになってくる。

すごく雪多いですよ。昨日は油断してました。福井に着いて、こんなもんなんだ、って思ったら、だんだん上がって来たら見たこともないような雪の深さになってきて、北海道より凄いです。そのとき生活様式を見ていて思ったんですが、発想が“冬”から始まってない感じがします。例えば北海道には「るいべ」という食べ物があります。凍った刺身で、口の中で溶かしながら食べるもの。サケなど寄生虫がいる魚がありますから、一度凍ったものを食べる。つまり、まず凍っていること、雪が多いことが当たり前で、そこから考えを組み立てていく。住宅も、冬にどういう住宅があればいいか、と考えます。なので北海道の家は屋根が三角で隣の家同士が離れている。ドサッと落ちた雪をゆんぼでさらってあげればいいわけです。

ところがここ（美山）を見る限り、夏から発想しているかな、と。名古屋や大阪や色んなところから影響を受け過ぎていて、例えば瓦というのはあり得ないですよ、これだけ雪が多いのに。冬から発想すれば雪への対処がもっと楽にできるのにな、と北海道の人は思います。しかし30キロ圏内で雪の多いところとどちらかといえば台風の備えをしなきゃいけないところが一緒になっていけば、両方の影響を受けるんだろうな。でも今こそここが、自分たちのライフスタイルを大切にしながらも、世界と交流しながら自分たちのライフスタイルを再構築していく部分じゃないか。そうすると、雪が多いというところから発想していくこと。地域らしさをデザインできれば、世界に通じる。このデザイン力は、デザイン、つまり一度壊して作り直すという力があれば世界に通じると思うんですね。

ただ問題は、「暮らし」と考えるか「観光資源」と考えるかで少し違います。「暮らし」と考えたら、暮らしは楽になった方がいいでしょう。そうすると、除雪しやすい住宅や暖かい住宅にした方がいいんだけど、観光となると、除雪ツアーがあるように、大変さの方が売れる場合があるんです。大変ですね、手伝いましょうというように、コミュニティビジネスの基本は、地域の困ったことをビジネス的に解決するという話なので、困ったことがあった方がいいという発想もある。それは“どこをどう選択するか”“らしさとしてどっちを持ち続けるのか”という。その辺、西洋ナイズされた北海道人は合理性をとってしまうんだけどね、いや、歯を食いしばって頑張るのが日本人なんだよって思うかどうか。それはその人たちの精神構造というか、その辺は宗教とも絡んでくるので、これもひとつの修行だと思えば毎日

雪でも耐えられるかもしれないですし。安易に暮らしを楽にして他と同じになっちゃう方がいいのか、そうじゃないのかというのは、ちょっと分かりませんね。

#### 《地方が日本の子ども達を救う》

日本の子ども達は今大変なことになっています。世界ではどうなのかというと、日本の子が飛び抜けて変なんです。それは何かというと、軽度発達障害と呼ばれる子どもの増加率が20年くらいかけてダントツ日本が伸びています。軽度発達障害というのは、よく言われているのは、多動（ADHD）、内向的な自閉症、アスペルガー症候群、が圧倒的です。

「個性」と「課題」と「環境」の歯車が合っていないのではないかと思います。ある種、発達障害の子ども達も「個性」といえます。でもそれに対してきちんとした「課題」が与えられて、かつ適した「環境」が与えられていない。その歯車さえ合えば、多分そうした障害は問題にならないんです。

でも日本は均一的な社会、かつあまり人と人とのつながりを大事にしない、コミュニティが崩壊しつつある。都会に行ったら隣の人は分かりません。田舎に行ったら人が少なすぎて友達がいません、みたいな。だからコミュニティがない中で、勉強だけしろという課題だけが与えられて、かつ押さえ込むような環境というのが均一化しているので、特段そこが見える。都市化している状況があって、その中で色んな問題が起こっているだろうと思うんですね。

これは僕の勝手な解釈ですが、人間の発達と人類の成達はある程度シンクロしていきます。人間はいろんな生物のいいところを受け継いで哺乳類になった。人間が進んでいるのはでっかい脳を持つてることくらいですが、そうすると、人間になってからの歴史を考えると、幼児期というのはサルくらいのものでした。だから森のようちえんが今すごく流行っている。あそこは環境として最も発達に合った環境。小中高校になると、今度は歴史観が入ってきて、農業とか農地、里地里山が一番フィットしてくる。大人になったら都市でもいい。だからそういう環境で、仕事もいっぱいあるわけです。

今日の雪はねも、頭悪くても力がある奴だったらいい。つまり里山には子どもにとっての課題がいっぱいあるわけです。でも都市化された社会だと、もう課題がありません。頭が悪いというだけで精神的にも病んでしまう。

発達障害で一番怖いのは二次障害です。お前は駄目だと言われることで鬱になってしまったり、あるいは切れてしまったり。そういう時にこそ、農村は未来の子どもたちのために一肌脱ぐべきでしょうと、僕は地域の人に言いたいわけです。今子ども達が大変なんだから、うちの村が日本の未来をつくるくらいの勢いで、子ども達にサービスするくらいの心意気でいきましょう、と。

農山漁村プロジェクトも同じです。お金がつくとかつかないとか、それは大切なことですが、それよりもこの大変な状況の中で、もうちょっと心意気でやるような人が農村部にも増えてこない。そして一方では、都市部の子どもを預かっていることの代償をしっかりと農村部に返す仕組みをつくるべきですね。

#### 《子ども農山漁村プロジェクトの意義》

子ども農山漁村プロジェクトで大事なポイントは、義務化されると全員の子どもが農村に行くということです。都市部の子どもが田舎に行くだけじゃなく、田舎の子どももどこかの地方に行く。

全員が行くと国税の対象になります。税金でちゃんと補填できる。受け入れた町や出した町に対して、交付税措置ができるということです。これは全員が行かなかつたらできません。ここが一番大事なところなんです。その後もっと行きたいという子がいたら、それは自己負担なり児童手当なりで自由にやっても構いませんが、やはり交付税が都市から田舎や農村に流れる理由付けとしては、子どもたちを受け入れて育てているのは農村でしょ、というちゃんとした論理やロジックがないとお金を出せなくなる。そこが一番の大きなミソですね。それと、農村の中にあるものをきちんと保存していくこと。

#### 《目的と手法》

この地域でどのように保存し、再生していくのか、という目標と手法ですね。目的をどうするのかを

ビジョンとして考えていかないと、話は始まらない。

まず、みなさんは農村コーディネーターやプロドゥーサーの卵だと思うので、僕の尊敬する3人のプロドゥーサーを紹介します。

一人は有名な結城登美雄先生。結城先生が一番よくおっしゃるのは「食こそは絶対の価値である」と。結城先生が今やってるのは、鳴子の米プロジェクトです。出前授業あり都会からの支援あり農村支援もあって、適地の米をつくり、農家と連携して様々な知恵を伝授して、全体のグリーンツーリズムをつかっていくプロジェクト。人々がいろんなことに関わり繋がることで、グリーンツーリズムになると。その関わりこそが大事なんだとおっしゃっています。

二人目は高知の方です。特産物のパッケージで売れているものがあれば全てこの人、と言われるくらい有名になっちゃいました。最初は馬路村のパッケージをやり、「島では当たり前サザエカレー」「実は茶どころ四万十茶」など、地域ブランドで売れたければこの人に頼めば大丈夫という人です。ただ、この人はデザイン屋さんなんですが、「土地の遺伝子をデザインで伝える」と言っていて、やることは徹底した聞き取りしかしないんです。ずーっと何日もかけておじいちゃん達から聞き取っていく。

あと最近注目しているのは、馬場ひろしさん。東京の有名なプランニング会社にいたのが、今は栃木県の益子町にお住まいになってカフェをやっています。それで「やっぱり土だ」と気が付いた。益子町は元々焼き物の町なので、やはり土にこだわりたいということで「土祭（ひじさい）」を復元し、全て土にこだわった町づくりをしています。すごく格好いいんです。町の人からもすごく尊敬を集めています。それは、地域の人たちも大切にしたいというのがあって、だけどそれをどう表現したらいいのかわからないのを上手く汲み上げて形にしている。いわゆる馬場さんの言葉でいうと「地域コーディネイトは、泥の中にある力を引き出す」と、心のドロドロした中にあるものをどう引き出して、格好よくデザインするか、とおっしゃっています。

#### 《白から土色へ》

マーケットの基本は白なんです。冷蔵庫、洗濯機、何とかがという白い家電製品ができて、「清潔」を売りにしてきた。その結果、土臭いものや汚いものはマーケットからどんどん外れていった。だから農村は格好悪いとされてきた。ですが、ここにきて、やっぱりアメリカのロハスの影響や色んなことがあって、多分これから「土」がくると思います。土の色とか樹の色が格好いいってなれば、社会はドラスティックに変わります。

これからは「泥」です。だからあんまり、自然学校でもオシャレの方向を間違えると全然売れないです。オシャレの方向を、都会にあるようなオシャレの方向に走ると飽きられちゃいます。じゃなくて、もっと泥臭いものをいいと思えるようにすること。

そこで大事なのは、マーケットをきちんと意識できるかどうかです。きちっと意識して、わざと泥臭い生活というか、あまり行き過ぎるとよくないですけど、デザインされているということ。その予兆はあります。ウッティとか木目というものに今どんどんシフトされています。次は土とか、ちょっと汚いもの。あまり清潔じゃないものにマーケットはシフトしていくだろうし、しないと社会は変わらない。

#### 《地域性を引き出す》

地域コーディネーターという、今は都会の人が田舎で働きたいというので、都会の知恵を田舎にというようなフレーズですが、それは全然違います。パラダイムをシフトして、「田舎の中にある土の匂いを都会へ」なんです。この発想がないと、都会のマーケットターやプランナーとは一緒にやれない。向こうの人の力を借りる時代ではない。ここが確立されていれば、都会的なマーケティングやプロドゥーサーではなく、泥の中にあるものをきちんと引き出して、本来そこにある地域性をきちんと引き出せるプロドゥーサーやコーディネーターやプランナーが生き残っていくし、そうしないと日本らしさはどんどん失われていってしまう。いろんな会議に出ると、最後売るところの10%は確かにデザインやマーケティングなんですが、それまでの90%はあまり議論されていません。そこが大事なんだと思います。

### 《日本の子どもの現状》

子どもの色んな現状の中で、NHKが去年調査した中学校2年生のアンケート結果があります。親に「学校の成績を強く期待しますか？」と聞いたところ、11%しか期待してないんです、親は。これは意外な数字ですが、諦めちゃうんですね。中2くらいになったら、うちの子は駄目って。親はそれまでに頭がいいか悪いか分かっちゃうし、社会がそういう人しか望んでないから、諦めちゃうんです、親が。大工になってもいい、何になってもいい、という社会的な価値観であれば色んな期待のしようがありますが、サラリーマンになって成績優秀でってことになると、この時点で80%くらいの子どものがコンプレックスを抱くわけです。今はそういう大変な環境です。

もうひとつは、24時まで起きている中学生が52%いる。これが、5年前だったかな、その頃はまだ二十数%です。僕や辻さんの世代では、中2で12時まで起きてる奴っていったら、勉強してるか深夜ラジオ聞いているかしかなかった。しかもそんな奴はほとんどいなかった。でも今は52%。何をしているかという、ほとんどインターネットが原因です。やはりこういう環境をつくってきちゃいましたよね、社会みんな。寝ないというのは身体に悪いことは誰でも知っていることです。頭にダメージを受けていく。

また、こういう数字が出ていました。海や川で遊んだことがある子どもは42%。へえ、結構いるなと思いましたが、カニや魚を取ったことがある人は27%。そこで養老先生は、「じゃあ何しに川に行くんだ？」と言った。この差に養老先生は危機感をもったらしいです。昔は川なんか行きたくなくても、魚をとるために川に行ったわけですから。食べものをとるために海に入ったわけですが、それが無いというのはどうなんだろうってことですね。あとはもう、学力の低下、運動能力の低下、コミュニケーション能力の低下、エトセトラです。

体力の低下に関しては、幼少期の自然体験活動でがんばってもらうしかないですね。コンクリートを歩いている子どもと山や坂を歩いている子どもと、大人になったときにどっちが体力あるかは、そんなの言わずもがなです。でもそこで何を思うのか都会のお母さん達は体操教室とかに入れてしまう。山坂走らせておけばいいでしょ、とう風にはいかない。そこではコミュニケーションする場もないですね。

### 《インプットの仕方を教える》

札幌の教育大付属小学校の体験学習を何年もやらせてもらっています。そこで総合学習の評価をやるときに、相互理解を考えるためには絵がいいんじゃないかということで、木で遊んだ時に子ども達の絵がどう変わるかということ撮り貯めています。そこで僕が感じたポイントは、人間はインプットとアウトプットしかない、と。情報を入れて、脳の中で情報を整理して、手先にもう一度信号としてアウトプットするというのは単純なことです。ですが、今学校教育の中で行われていることは、アウトプットの鍛え方なんです。線をどこに引くとか、影をどこに付けるとか、アウトプットばかりやる。インプットはどうするのかというと、「木をよく見て描きなさい」というわけです、先生は。よく見て描くというのはどういうことか、ということは全然教えない。インプットの仕方は何も工夫がない。なのでインプットをちょっといじると、あっという間に絵が変わるんですね。

脳はネットワーク機関なので、いろんな刺激や自分との繋がりをつくることのできる。そして非常に多くのインプットができる。つまり木だけ教えるんじゃなくて、他との繋がりを教える、感じさせながら五感を使わせることが大事なんです。

もうひとつは「主体性」。自分が描こうと思うか思わないか、あるいは見ようと思わなければ見えない。この辺がインプットのポイントにあって、これがないと絵は上手くならない。これは、さっきの学力低下も全く同じで、試験でどんな答えを書くかというのは全部アウトプットです。どうやって勉強し、何を考えるかというインプットはやってないし、それは体験教育の中でしかできないんですね。

### 《経験知と形式知》

だから、臭いを嗅ぐとか触るとするのは経験知。これは、元々は生活の中にあった。農的暮らしやコミュニティの中にある。だけどこれははすごく効率の悪い教育です。全部体験しないといけないから。だからこそ全部生活の中にあったんです。それに対して学校で教えているのは、形式知。法則や一般化や

観察のやり方。これは非常に系統立てて教えられるし、技術指導もできる。とても効率的だから学校教育でやっています。この2つが両輪となって初めて学力はアップするんです。しかし今またもや形式知の方にばかりいますね。学校時間が短いとか、塾とか、でも経験知がないとそんなに伸びないですよ。

やはり今、体験学習が学校教育の中でも行われなければならない理由がここにある。そのことを力説しないと、学校の先生は振り向いてくれません。忙しい中でなぜ田舎に行かなきゃいけないんだって言われた時に、いやいや待って、行った方が先生の仕事も楽になるはずですよ、と。だってこれなしに先生が色んなことを教えたって、子どもは理解できてませんよ、と。なぜなら家の中での経験が本当に少ないんです。生活がみんな都市化しているから、何でも買ってきて、生活や生きることをアウトソーシングしている。そこに法則だけ教えられたも、何言われてるか全然分かりません。

地域に言いたいことは、子ども達が来たときには経験知を教えるんだよ、ということです。すごく非効率だけど、子ども達に何かをさせなきゃいけないんだよ、と。昔は田舎では子どもに教えるの得意な大人が結構いた。じっと見守ってくれていて危ないときだけ助けてくれたり、ヤバいときにはすごく怒ったり。教え方が上手かった。今は子ども自体がないから教え方が分からないのと、学校でしか習わないから急に学校の先生みたいなことを言い出す人がいます。ハイ並んで、とか。ものを教えるのを学校でしか見てきていないから、学校の教え方しか知らない。

だから農山漁村プロジェクトでは、地域の人も学ばせ方を練習できるということ。そうすると、その後の国際交流やサマーキャンプでの扱いも上手くなっていくはずですよ、きっと。そういう意味では、農山漁村プロジェクトを起爆剤として、地域が人に何かを学ばせる学ばせ方をきちんと習うこと。それで特に経験知の教え方を学ぶことだと思います。

#### 《子どもの居場所は仕事である》

今、心を育てる「ここいく」という活動を、札幌市の動物園で放課後の子ども達を集めて活動しています。そこに集まってくる子どもの半分以上は、発達障害児です。都会だからしょうがないんですが、まず放課後子ども達が行くところがない。学校はまず責任があるから帰らせる。次に児童館に行くんだけど、児童館の数が減っていて指導者1に対して子ども20くらいになっている。そうすると、チョロチョロした子が来ると困るんです。だからお前は来るなと言われちゃう。すると今度は習い事に行くんですが、習い事はとんでもない。そうすると、本当に困ってるお母さん達が、こういうところに来るんです。

それで集まってくる子どもは、多動や自閉症の子から、すごく頭がいい子まで、バラッバラです。最初は無理じゃないかと思ったんですけど、結論からいうと、自然は偉大だな、ということだけ分かりました。自然の中に放したら、それぞれに課題を与えてくれるんです、自然が多様であれば。これは農村でも同じで、生物多様性や生態系サービスが多様であれば、たくさんの課題を与えてくれる。

自閉症の子を、僕らは今「感覚統合」という理論の元でやってるんですけど、感覚を統合させるために力仕事が一番大事なんです。物をぐっと掴んで、それを運ぶとか。また自閉症の子は縦にしか揺れられないようで、水平には揺れない。これが統合されてないということなんです、揺れるという動きも脳にすごくいい影響を与えるそうです。

そういう風に見ていると、自閉症の子は黙々と大きい石を運んでダムをつくったりするんですね。また棒をいっぱい集めて、棒博士みたいになってる。とにかく棒に執着して、そこでずっと触ってる。この触るというエネルギーもすごく大切みたいで、そのうち「ぼっこ隊長ね」って言ったら棒を皆にくれるんだよね。だから仕事がいっぱいある。自分が伸ばしたい能力が伸ばせるんです。自然や環境が豊かであるということで、彼らが自分で発達させたいと外発的に思うはずなんです。

この活動の中心は「仕事」です。動物園だから動物園の仕事がたくさんある。動物はいいですよ。特に馬はいい。なぜかという、「これやって」って言ったらやらないけど、「馬のために柵つくって」って言うとやってくれるんです、子ども達が。それはやっぱり動物が成せる技というか、ネイチャーというのでもいいんだけど、より近い存在として家畜というものがいる。自然と僕らを結ぶ間に。これは人口のものとはいえ動物だから、この間くらいにシンパシーがある。家畜を使うというのは最近面白いです。

それで「居場所」ということを考えたときに、人間にとって何が居場所なのか。放課後プランということ文科省がやっていますが、子どもの居場所づくりという中では、放課後子どもをどう遊ばせましょうか、ということがたくさん議論される。でも僕がこの活動を通して分かったのは、遊びは彼らにとって余暇ではあるけど居場所ではないんだということ。彼らが居場所として考えられるのは、きちんとした課題がある「仕事」なんです。お前がやるべきで、かつ他人のためにもなっていること。そうすると、子ども達はリピートしたり休まなくなる。やっぱり居場所というのは「仕事」とか「役目」「役割」。それは、こういう地域でも高齢化が進んできたときに、老人の居場所とは何か、とイコールです。なので仕事をどう作ってあげられるか。おばあちゃんにしかできないこと、もしくは、できるんだけど、おばあちゃんがいないと困るんだよね、ということ。そこで身体を動かすことが大事なんだと思っています。

#### 《生きる力とは何か》

僕は文科省に提言したんですけど、「生きる力」ってあなた方言いますが、どう生きることをいってるんですか？って聞いたところ、すごく嫌な顔をされました（笑）自閉症の子ども達と放課後過ごすことで気付いたことは、まず一番大事なことは、「生きる」ということです。物理的に。息をする、自律神経を整える。暑いとき寒いとき、それらを感じて身体の調子を整える神経を養う。また反射神経もありますよね。アツと言ってアツと言えるかどうか。今は固まっちゃう子が多い。

次に「逞しく生きる」ということです。本能に近いところ。飯をバリバリ食うこと。あとは、怒りや恐れなど「情動」心の動きですね。例えば24時まで起きていて朝ギリギリまで寝たら子どもの食が細くなるのも当たり前ですよ、生活リズムが崩れてるわけだから。

次は「うまく生きる」。読み書きそろばんです。これは持ってないと世の中渡っていけないのでやる。そして最後に、自己実現や創造など「良く生きていく」。

「うまく生きる」部位は大脳新皮質といわれるところで、後からできた力です。これは読み書きそろばんで、ここは学校でやる。学校でやるのは結局、最後の2つです。かつ、今の脳科学ブームでこの前頭連合やはすごく注目されていて、その2つだけが肥大化してるんですね。その土台は誰も意識をしていない。ここを意識するということは、まさに農的生活様式の中にあります。朝、日の出と共に起き、身体を動かし、3時のおやつをガッツと食うという。

それで、マッスルというおばさんが言うには、欲求というのはこういう風にピラミッドの段階になっている、と。下の方が満たされないと上位にはいかない。「生理的欲求」「安全の欲求」「愛情、心情」「自己自尊と尊敬」そして「自己実現の欲求」。これが、「生きる力」の段階とリンクしてるんです。

マズローの形は逆三角形になっています。一番下が大切だから土台からだんだん細くなっている。これが、今日本の教育は逆三角形になっちゃってるんです。だから、上の自己実現の欲求ばかりを挙げてから、つまり大脳新皮質や前頭連合やばかりが取り上げられるんです。最近、自己発見だとか何とかがいっぱい出てますよね。逆三角形になってるから弱いんです、だから簡単に自殺しちゃう。本当の意味での生きていくというところが細くなっている、上ばかり積んでいるので、何かあったときにボキッと折れちゃうんです。社会としてもそう。何かあったら「もう駄目だ」ってことになっちゃう。

これも国際的にいうと、30歳までの若年層の自殺率は、日本がダントツ一位です。あとは色んな事件を起こす、あれも自殺ですよ。引きこもりも、いわゆる社会的自殺。土台が細くなっているという認識をもつと、やはり土台をしっかりとするために農山漁村交流プロジェクトの意味はもうひとつある、と思います。それも一部の子ども達だけじゃなく、底辺の子ども達みんなにいき渡るように。そういうムーブというか、農村に行くとよく飯を食いよく眠り、身体を動かすということをやるとするのは大事だと思います。

#### 【質疑応答】

Q: 地域をコーディネートするときに、10%が売り方で90%は実はあまりできてないということでしたが、その重要な90%というのは具体的にどういうことですか？



A: まずは「地域の真のニーズは何なのか」ということです。それは地域や自分も含めてのことですが、本当に求めていることは何なの？と。つまり、都会でこういうのが流行ってます、だから売れるからこういうのをつくるというのではなく、やはり自分たちが今しなくてはいけないこと、やらなくてはいけないことは何なのか？というリサーチが第一。

その次に、ポテンシャルとしてお宝探しが出てくるじゃないですか。お宝探しも、宝を磨くということより「宝は何か？」という話で、目に見えるものはあまり宝じゃない。もちろんそれがちゃんとした表現系で出されてる場合はいいですが、例えばカブラは本当に宝かどうかを考えなきゃいけないね。だから、そこにある精神性を代表してカブラになっていけばオッケー。でもそうじゃなくて、誰かがちょっと金儲けのために大豆植えましたというようなものだったら見直す必要があるかもしれない。つまり、引き継ぐべきものなのか、伝えるべきものなのか、というスピリットを考える。そこまでいくと、恐らく外の者でも誰でも引き継げるんです。技術じゃなくて、心なんだよ。そういうところまで、コーディネーターがポテンシャルを分析しないとイケない。

大抵は、こういうのが流行っているからこうしたら売れるんじゃないか、という上辺に終わっています。そこも大事なんだよ、でも最後で必要なの。本来はその前のところで、今日本や世界の中で必要なもの何で、特質は何か、本当に地域の人は何を宝として持っていて、何が脈々と受け継がれてきたスピリットは何なのか、というところまで分析して、かつデザインし直していくことです。

Q: 土の匂いや素材は、森のようちえんでは受け入れられますけど、小学5年生になると単に服汚れるのが嫌だったり、感覚的に泥んこというイメージがついてしまっていて、実際の活動のときにそういう障害が出てくると思います。幼少期の子と小学5年生の子で、活動の持っていく方の違いなどがあれば教えてください。

A: 学校とやる場合は、やはり学校のニーズを考えなければならぬので、今一番課題となっているのは、学校のカリキュラムとどう合わせるか。これは大樹町というところでやっていることですが、農家民宿に行く時間は、名刺を作って挨拶に行き泊めてもらう、ということで道德の時間になっていたり、カヌーは体育の時間になっていたり、一応そういうことが切り替えられるようになっていきます。あとは評価の観点で、ポートフォリオのようなものを開発して、評価できるようにしたり。だから学校とやる場合には学校の文化に合わせなきゃいけない。

また暗黙の了解というか、この子は5年生だから必ずこれはできる、という発想は減らした方がいい。ある部分では幼稚園児と同じと思ってもいい程です。結局、個々人の体験度をある程度見ながら課題を与えないと、小学校5年生だからこれ、幼稚園児だからこれ、という風には考え辛くなっている。小学校5年生でも幼稚園児並みの部分がある。勉強はすごくできるけど、ある経験に関しては幼稚園児と同じ、という。だから小学5年生だから皆が外で虫を捕ったことがあるとか、そういう暗黙の見解はない方がいい。

Q: 学校の先生に話を聞くと、プログラム重視でやっているところが多いんです。海にいったり地引網をして、その次はどこ行って何してっていう、思い出をつくるための体験プログラムが組まれていることが多い。その辺何か感じることはありませんか？

A: そこも今大きな溝になっていて、これは僕らの組織の中でも、その溝を取り除こうとしています。まず学校教育と社会教育の大きな違いは、「手法」が違います。学校はカリキュラムと違って横につながってるんです。明日、明後日とやっていけるので、例えば国語やって体育やって算数やってもオッケー。なぜなら、今日の国語と明日の国語がつながってるから。でも社会教育では、意外と縦のつながりを重視します。今やっていることと次にやることの関係性を大事にする。「フローラーニング」と呼ばれますが、流れのある教育なんです。それが一緒にやろうとしているので、お互いに違いがあることを認識して、説明しなきゃいけないですね。

また学校教育は、ひとつのことを全員が分かることが学校教育です。社会教育はその人が主体だから、その人が好きなだけ勉強すればいい。そこにも目的も手法も違うので大きな溝があります。それは、学

校の先生にも僕らの手法をきちんと理解してもらう必要があるし、学校側の不安にもしっかり理解をするという寄り添う形がないと、このプロジェクトはうまくいかない。

僕たちがどういう風にやっているかというところ、コンセプトという狙いまでは両者でつくって、残りはこっちに丸投げしてもらっています。先生方、後はお任せ下さい、狙いは達成します、と。それを評価すればいいでしょ、と。でもその信頼を勝ち得るまでには何年もかかります。

学校の先生は、自己顕示欲とか所有の要求がすごく強いので、自分のクラスを誰かに預けることでクラスがむちゃくちゃになるんじゃないか、とか、自分のクラスに誰かがそこに入ってくることに對して、どうしても硬いです。そこがまた今回の課題です。学校教育と社会教育の手法が違うことを両方で理解し合う、という。

ちなみにこれは十勝でやったプログラムですが、「地域側の目的が何か」という話です。どんな目的でどの手法を使うのか。例えばチーズづくりをするのですが、チーズってその場で食べられないから数ヶ月後に送られてくる。そこから産直が始まるわけです。またはリレーチーズといって、自分たちがつくったチーズを次の学校が食べる。ちょっと夢があるじゃないですか。他の学校ともつながるような感じになる。

また、その地域にある食材を使ってハンバーガーをつくる。なぜハンバーガーか、というところがミソで、最初は郷土食を食べさせた方がいいんじゃないかと地域の人も言っていたんですが、それでは意味がない。つまり普段彼らが食べているものじゃないと、驚きがない。子ども達は普段マックを食べてるわけです。それでフードマイレージをゼロにするというミッションで彼らにつくらせる。すると、とんでもなく高くなります。1個1500円くらいかかる、そんなにはかからないか(笑)そしてめちゃくちゃ旨い。そうすると、大抵次の日の会話は、俺たちが食べてるマクドナルドのハンバーガーは何なんだろうって話になります。そんなに皆バカじゃない。テレビでいっぱい偽装の話もやっていて、今の子ども達は色んな知識を持っている。それが体験と結びつくと、そういうディスカッションになります。そこに驚きがある。すると、今度は無言。食べるときに一言も喋らず食べています。

Q: 以前の講義で、いろんな体験をさせるのが学校の先生にとっては大事だと聞きました。その話ではコンセプトが明確ではないように思えたんですが。

A: それは、先生のおっしゃることも分かります。いろんな体験をさせたいというのは、先生の打算としてはそうしたことを使って授業をつくれるからです。なので、こちら側としてはその真ん中に入って、利害関係者としては参加者と地域の方と両方いるわけだから、その中間をとってあげないといけません。体験だけやるんだったら、地域側は消化不良になるでしょうし、そちら側のニーズも併せて間に入らないと。

もうひとつの課題は、先生です。このプロジェクトを推進していく中で課題になるのは「先生」。ちょうど30代くらいが、スポット的に自然体験が抜けている世代なんです。20代は、ロハスだ、スローフードだと言っている世代なので、ちょっと戻ってきている。でも30-40代の方はまさに詰め込み教育できているので、スッポリ抜けています。なので親御さんも学校の先生もやったことがないから、打ち合わせしてもイメージがつかれないからものすごい不安になるんです。だから次々と質問をしてきたり、いろんな準備をするんですね。だからもしかしたら、親の教育みたいなものをセットでやってもいいのかもしれない。親プログラムみたいなものを。あるいは先生向けのプログラム。それはひとつ大きな課題ですね。

(終)